

# 震災伝承 世界に発信

## 「KATARIIBE」共通語に



### 語り部フォーラム

東日本大震災の教訓を伝える語り部が一堂に会した「東北被災地語り部フォーラム」。若者への継承や、津波の爪痕を残す震災遺構などの重要性を確認し、震災伝承を世界に発信するための共通語として「KATARIIBE（語り部）」を広めていくことを誓い合った。

パネルディスカッション

では、石巻市立大川小学校遺族の佐藤敏郎さん(53)ら

(気仙沼市)の山内宏泰学芸員は「被災者が亡くなったあとも、同じように伝えられる方法を今から考えないといけない」と訴えた。

このあと、参加者は4分

宮城、岩手両県から3人が登壇。佐藤さんは「悲しみは消えるものではなく、どう向き合うかを考えることが大切」と話し、葛藤する経験も含めて伝える重要性を説いた。

亡き兄への基句を披露したのは岩手県釜石市の藤原マチ子さん(63)。「歌は時間を超える力を持っている。震災を表現する方法を自分なりに見つけてほしい」と話した。

震災関連の展示などを行うウリアス・アーク美術館

## 遺構内部を見学 バスで被災地回る



鉄筋が垂れ下がる高野会館の内部を見学する参加者(29日、南三陸町で)

フォーラムに先立って行われた「語り部バス」には、約100人が参加。3台のバスに分乗し、約1時間かけて町内の被災地を回ったこの日は、通常のコースに加え、民間の手で保存されている震災遺構「高野会館」の内部見学も行われた。

津波の爪痕が残る高野会館の前で、語り部の伊藤文夫さん(73)が、震災前の写真を手にも、当時の様子を参加者に語った。震災時は芸能イベントが開かれており、327人が屋上などに避難したが、帰宅した数人が犠牲になったという。伊藤さんは「会館にいれば救

えた命だったのに」と苦い表情で振り返った。

高さ約23層の津波が押し寄せた旧戸倉中では、校庭に止まったバスより高い津波の高さに、参加者はため息を漏らした。伊藤さんは「慢心せず、より高いところに避難してください」と強調した。

参加した県職員の高橋倫太郎さん(51)は「震災が風化しないよう、国内外に向けて被災体験を伝える語り部の重要性を改めて感じたい」と話した。

2017年 1月 30日 (月)

【読売新聞】